

高槻市消防本部 放射性物質災害を想定した消防訓練 印象記

佐藤 俊宏

2017年2月20、21日に、大阪府高槻市消防本部において、放射性物質災害を想定した消防訓練が実施されました。高槻市消防本部では放射線研修会が毎年開催され、今年度は本番さながらの実地訓練が行われました。時折雪の舞う寒さの厳しい日もありましたが、訓練には2日間で64名の消防隊員が参加しました。その様子を以下に紹介します。

「震度4の地震が発生し、5名が作業する放射線取扱施設において、放射性物質が漏洩する事故が発生



写真1 現場へ向かう隊員



写真2 現場指揮本部

した。4名が負傷したまま施設内に取り残されており、1名が自力脱出し通報した。」との想定で訓練が始まりました。通報を受けた消防隊員が施設へ急行します。放射性物質の漏洩との情報から、放射線測定を行いながら災害現場へ向かいます(写真1)。

施設の傍では、自力で脱出した被災者が救助を求っていました。隊員が被害状況や放射性物質による汚染状況、怪我人の状態を、離れた場所からヒアリングします。漏洩した放射性物質の核種や線量に関する情報が本部に連絡されました。その後、NaI(Tl)シンチレーションサーベイメータを手にした隊員が線量をモニタしながら被害者に近づき、着衣や靴に汚染がないことを確認します。

放射線測定結果に基づき進入規制ラインが設定され、その境界に仮設の除染テントが設置されました。また前進指揮所とその後方に指揮本部が設置され、救急隊をはじめ特殊災害隊や消火隊が集結し、必要な資材が到着する等、次第に救助体制が整ってきます。本部には「現場指揮本部」の幟がはためきます(写真2)。

全身黄色の化学防護服を装着した救助隊員4名が、線量を確認しながら施設内に入ります。災害現



写真3 線量が低い場所での応急処置



写真4 仮設の除染テント

場に到着後、辺りの汚染状況を確認し、前進指揮所と連携しながら棚の下敷きになっている重傷者2名(人形)を救出しました。線量が低い場所へ移動させ、被ばく低減・汚染拡大防止のため、放射性物質が付着した重傷者の衣服を脱がせます。着衣を素早くハサミで切開し(写真3)、重傷者をアルミシートで包んだ後、軽傷者2名と共に屋外へ搬出しました。汚染した負傷者を除染テント内のシャワーで洗浄し(写真4)、体表面汚染がないことを確認します。現場到着から約15分で負傷者を救助しました。その後、負傷者は救急隊へ引き継がれ、専門の病院へ搬送されました(写真5)。残った救助隊員は、トンクを使って放射性物質に汚染された衣類を回収します。除染テントで全身を除染し、全員が防護服を脱いだところで訓練は終了となりました。

閉会式では、訓練を見守った大阪医科大学の高淵雅廣氏、大阪医科大学附属病院の秋田和彦氏、日本たばこ産業(株)の矢鋪祐司氏より「隊員の熱のこもった訓練に感心した」、「年々無駄な動きが減り進歩がみられる」、「放射性物質をおそれず・あわてず・あなどらず対応して下さい」等の感想や意見が述べられました(写真6)。

隊員の皆さんは線量に応じてゾーニングを行う等、現場状況をしっかりとイメージしながら救助活



写真5 負傷者の病院への搬送



写真6 閉会式

動に取り組んでいました。大西道明消防長からは、「我々は日常、五感作用を活用して消防活動を行います。放射線は目に見えないし匂わないのが厄介で、訓練ではそこに留意しなければならない」とのコメントがありましたが、各隊がこれを実践しており、こちらまで緊張感が伝わってくるような本番さながらの訓練でした。被ばくや汚染拡大を防止しつつ、迅速に人命救助しなければならない難しさを改めて実感しましたが、2日間の訓練状況から高槻市の放射線災害時の対応は万全と確信し、消防本部を後にしました。

(日本たばこ産業(株))